
Another 555 story **鋼の天使**

かんてん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another 555 story 鋼の天使

【コード】

N0133M

【作者名】

かんでん

【あらすじ】

そう遠くない未来、どこかの世界 人類は、オルフェノクによって支配されていた。

これは、乾巧も尾上タクミも存在しない世界で起きたもう一つのパラダイスロスト。

プロローグ（前書き）

初めまして、初めて小説を投稿させてもらいます。

他の方々のすばらしい作品を読み、自分も書いてみたい！！

という、小さな気持ちから本能の赴くまま書いてしまいました（笑）

小説というものを書いたことがありませんので稚拙な文や誤字が目立つと思いますが……楽しんでいただければ幸いです。

プロローグ

月明かりだけが頼りの薄暗い廃工場の中、資材の上に座り込む男とその男の前に立つ男がいる。

「二度も言わせないでください。我々スマートブレインは君の力を必要としている」

上品なスーツに身を包んだその男　スマートブレインからの手先
は薬指で眼鏡のズレを直しながら苛立った様子を露わにして目の前の青年に告げる。

「ふざけるな、お前等の怠慢が積み重なって起きた事態だろう。自分の尻くらい自分で拭け」

一方資材の上に座り込み、膝の上に肘を置いて頬杖をついている青年は自分を見下す眼鏡の男に視線を向けることもなく、面倒くさそうに呟く。

「それに、人様に物事を頼む態度がなってない。実に気に入らない」
青年は初めて相手と目を合わせる。そしてそれと同時に中指を立てて相手に見せつけるように突き出し

「社長に伝える、次からはもっと礼儀の正しい奴を寄越せとな……
あ、ついでに菓子折りでも持たせるとな」

ゆっくりと腰を上げパンパンと尻の埃を左手で払い、怒りで眉を引きつらせている眼鏡の男に視線を向けることなく青年はまるで男な

ど見えていないかのように相手の横を通り過ぎる。

「交渉は決裂………仕方ありませんね。ですが、”ベルト”だけでも持ち帰らないと首を切られてしまいますからね………悪く思わないでください」

男は怒りに心を捕らわれないよう深く酸素を吸い込み、流れるような上品な動作で眼鏡を外して胸ポケットにしまい、狐目をさらに細めて相手を睨みつける。

次の瞬間、男の顔に動物の顔を模した彫刻のような影が浮かび上がり、男は灰色の異形へと姿を変える。

「猿の”オルフェノク”か。人間の時の方が頭がよさそうだぞ？」

青年はゆっくりと振り返るとこちらに駆け寄ってくる灰色の異形をへらへらと笑いながら見据える。

【オルフェノク】

それはこの星で繁栄を極めた種族、人類の新たな姿。死を経験した人間が死から蘇り、時として人間ではない他の生物の能力を有する新たな種族、オルフェノクとなる。

「天のベルト、スマートブレインに返してもらいましょう!!」

猿の異形モンキーオルフェノクは彫刻のような灰色の鋭い爪を、自分をあざ笑う憎たらしい相手の首筋へと振り下ろす。

ガアアン、と金属同士がぶつかるような音が周囲に響きわたる。青年の身を裂くはずだったその爪は爪先に紅い鮮血を滴らせることなく強固な何かに阻まれる。

「悪いねえ、まだまだコイツを手放すわけにはいかないんだよ」

不敵な笑みを浮かべた青年の異形と化した左腕は相手の爪を受け止めていた。

キチキチと耳障りな音を立てながら擦れ合う相手の爪を灰色の左腕で払い落とし、がら空きになっている猿の腹部に体重を乗せた蹴りを押し込む。

「グウウツ!？」

モンキーオルフェノクは両腕で腹を抱えながら数歩後退り、苦悶と怒りの混ざり合ったような表情を青年に向ける。

「そのベルトの力で私を倒したところで……スマートブレインから逃げられると、思わないでくださいよ……!!」

青年は埃だらけのデニムから携帯電話のようなものを取り出し、何かを打ち込む。そしていつの間にか、青年の腹部には銀に蒼いラインの入った機械仕掛けのベルトが巻かれていた。

「ちゃちゃっと終わらせようか、変身」

青年は緊張感の全くない声で淡々と呟けば携帯電話状の何かを閉じ、機械のベルトに叩き込む。

『complete』

ヘルトから無機質な声が流れた次の瞬間、光が黒と灰色の空間を蒼い世界へと染め上げる。その光は蒼いラインとなつて青年の全身を駆け巡り　　純白の騎士、サイガへと青年を変えた。

機械仕掛けの純白の甲冑、全身の甲冑を駆け巡るコバルトのライン、胸部に輝く薄紫のコアに同じ色の巨大な複眼。

薄汚れた灰色とは対照的な白いボディを月光で輝かせ、サイガは右の掌を握ったり、開いたりと繰り返す。

「そら、歯を食いしばれ！」

サイガはモンキーオルフェノクの目の前へと一瞬で距離を詰め、右の拳を相手の顎へとねじ込む。

「アガアアツ……！！」

グシャリと嫌な音を立て、顎を砕かれたモンキーオルフェノクは数メートル程吹っ飛び地面に散乱していた資材の上にドサツと落ちると全身を痙攣させ、立ち上がれなくなった。

サイガは痙攣する相手の元へとゆっくりと歩み寄り、既に戦意も戦力も喪失した灰色のガラクタの頭に右足を乗せ、思い切り踏み潰す。

「勝てる見込みないのに、襲いかかってくるなっつもの」

サイガは青い炎を上げながら崩れ落ちていくガラクタをぼんやりと眺めながらヘルトから携帯電話を外し、ボタンを押す。全身を包ん

でいた蒼いラインがベルトへと戻っていき、蒼い光が白いボディからふてぶてしい表情の青年の姿へと変える。

「いつまでも高い所で見下ろしてんなよ、スマートブレイン……………」

青年は携帯電話をポケットへと戻し、廃工場の割れた窓ガラスの向こうに見える超高層ビル　スマートブレイン本社　を睨みつけ、廃工場の出口へと歩を進める。

「このベルトで、この腐った時代を終わらせてやる……………！！！」

プロローグ（後書き）

このような幼稚な小説にお時間を割いていただき、ありがとうございます
います m (| |) m

気になった部分や、直したほうがいい部分などありましたら是非是非
非感想にください！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0133m/>

Another 555 story 鋼の天使

2010年10月10日16時57分発行